いのちと地域を守る

ヤフーが「災害カレンダー」開設

防災啓発 日常の中に

考える

災害発生時、事態をいち早く把握するのにインターネットは便利だ。ただ、被害を軽減するには事後対応では手遅れのケースもある。どうやってユーザーに備えてもらうか―。IT大手ヤフーは今春、国内外で起きた主な災害の記録をまとめた「災害カレンダー」を開設。平時からの防災啓発に力を入れ始めた。（防災・教育室　大泉大介）

災害カレンダーはヤフーのトップページから「天気」に進み、「防災情報」の中にある「災害カレンダー」の項目をクリックすると見られる。

カレンダーの名の通り、国内外の災害を発生日ごとに記している。1日時点で200件超の災害を掲載。災害名をクリックすると、被害などの概要のほか、惨状を伝える写真や当時の新聞紙面などが表示される。

地震、水害、噴火、大火災などと、扱う災害は多岐にわたる。ヤフー天気・災害チームの瀬川浩司さん(41)は「災害は地球上のどこかで毎日のように起きている。カレンダーを眺めることで自然の怖さを日々思い起こし、備えの実践につなげてほしい」と狙いを話す。

写真などの収録データは1400件を超える。河北新報社も趣旨に賛同し、東北で被害のあった災害を報じる紙面データを提供している。

東日本大震災の発生から6年を迎えた今年3月に公開を始めた。ユーザーからは「災害がこれほど頻発しているとは思わなかった」「教訓を風化させず、今後の防災に生かさないといけない」といった評価の声が届いているという。

「自然の怖さ 日々考えて」

ただ、課題もある。アクセス数が伸びたのは、災害カレンダーの入り口をトップページにも設けた3月11日と、熊本地震が発生した4月14日。節目に注目度は上がっても、持続しないのが実情という。

今後は入り口を増やして目立たせたり「プッシュ通知」を活用したりして、アクセス増につなげたい考えだ。掲載する災害を年内に365件以上に増やすほか、被災経験者の体験記も募り記事の充実を目指す。

瀬川さんは「大切なのは防災の知識だけではなく実践。個々人が防災対策を『いつかやろう』ではなく、『今日やろう』に変えるカレンダーに育てたい」と意欲を語る。

災害カレンダーを開発したヤフー天気・災害チーム。瀬川さん（右）は「今後も改善を重ね、災害から命を守る一助になりたい」と話す＝大阪市北区

災害カレンダーのトップページ㊤。5月26日をクリックすると、1983年のこの日起きた日本海中部地震の被害概要や当時の新聞紙面などが見られる㊦

■東北大災害科学国際研究所・佐藤翔輔助教に聞く

ネット発信の意義大きい

インターネット大手のヤフーが発信する「災害カレンダー」は今後、どんな使い方が考えられるのか。災害情報が専門の東北大災害科学国際研究所の佐藤翔輔助教に聞いた。

―取り組みをどう見る。

「防災の基本の一つは『普段の生活に織り交ぜる』こと。生活のスタンダードになっているネットに、ヤフーが防災啓発の機能を組み込んだ意義は大きい」

―課題は。

「プッシュ型配信の導入などで一層の浸透を期待したい。ヤフーが提供する路線検索やオークションなどにもカレンダーを組み込めば、もっと多くの人の目に触れられるだろう」

―ユーザー側に求められることは。

「防災に限らず、人には『知ったただけでは実行できない』という壁がある。カレンダーで災害の歴史を知ったら、次はそれを自分のこととして考えたり、家族で話し合ったりして実行につなげてほしい。学校などで防災学習に活用することも提案したい」

探る

■北上川流域の天然スレート葺き

生業とくらし 保全を

東北工大教授

大沼　正寛さん

おおぬま・まさひろ　東北大大学院工学研究科博士後期課程修了。建設会社勤務、東北文化学園大准教授、東北工大准教授などを経て16年から現職。専門は建築設計・風土建築論。仙台市出身。45歳。

資源も災害も多い、この東北の風土に適した住まいや集落に、普遍的なかたちはあるのか。郷土建築家として歴史的建造物や町並みの調査・保存、民家再生や住宅設計などの実践研究を重ねる中で2011年、東日本大震災は起きた。

震災直後に「北上川流域における天然スレート民家の建築歴史地理」の研究を本格化。石巻市、宮城県女川町、南三陸町、登米市、陸前高田市などでスレート葺きの住宅や倉庫2000棟以上をマップ化し、現在も継続中だ。

天然スレートは、粘板岩を厚さ6ミリ程度の板状に加工した黒灰色の石材。明治初期、石巻市雄勝町で採れた硯用の「雄勝玄昌石」が教育用石盤に生かせることが再発見され、やがて洋風建築の特需で大規模に生産された。旧北海道庁（1888年）、東京駅（1914年）、岩手銀行赤レンガ館（旧盛岡銀行本店本館）など各地の公共施設や邸宅に用いられた。

だが、北上川流域を中心に、地元の民家に広く用いられていることは十分認識されておらず、未踏の研究領域となっている。中には壁面への使用例もあり、独特の造形意匠が魅力だ。明治・昭和の津波災害遺構ともいえる年代のものもある。

震災で沿岸部の遺構が激減したものの、スレートの文化的景観を保全し、防災減災の知恵や生活文化を継承しようと、沿岸部各地の復興支援に参画しながら、広域ネットワーク「スレート千軒講」を立ち上げた。30年後の1000棟保全を目指す。

懸念は、かつてスレート葺きが普及した沿岸部の住まいや集落の行方である。多様性に配慮せず「職住分離」を強いるのは疑問だ。人々の生業と共同的経営が織り成す生活景には、農林漁業と防人を兼ねた知恵や技、持続可能な社会への示唆がある。

もちろん、高所に拠点を持つことは必要だ。生業と日常生活は浜に、将来世代に伝える資産や神仏は丘に置く生活形態があっていい。ICT技術がそれを支えるなら、温故知新というべき農山漁村計画が可能になる。

だが、東北の民家集落史が総括されておらず、これに基づく計画論がない。既存制度に頼って整備される都市近郊と変わらない道路や宅地の姿に、温故や知新に寄与できていない建築学の微力さをかみしめる。

自然の恵みと畏怖に向き合う生業とくらしの再構築は、被災地域だけでなく生活デザインの共通課題だ。

太古の地質と近代化が生み出し、広く地元に普及して生業とくらしを包み、工芸・建築の材料ともなっているスレート。その複合的意義を考えると、希少遺構の「保存」や観光への「活用」も必要だが、まずは屋根下の生業とくらしを中心に、屋根上にそっと葺かれた状況を少しでも長く「保全」したい。

伝える

2011.3.11

仙台空港にほど近い岩沼市の建設資材リース会社「丸藤シートパイル仙台工場」の嘱託社員渡辺達雄さん(65)は東日本大震災の発生後、車で帰宅中に道路をさかのぼる津波に遭遇した。川の堤防に上がり、命拾いした。

渡辺達雄さん

■川の堤防へ避難（岩沼市）

津波 足元2メートル下まで

あの日は仙台市で会社の会議がありました。終了し車で工場に戻る途中、大きな揺れに襲われました。

工場の事務所に着くと、停電の中、従業員らが携帯電話のテレビ機能で情報収集し「津波が来る」と教えてくれました。事務所から海岸線までの距離は約1・2キロ。当時、工場長だった私は従業員にすぐ帰宅するよう指示しました。

19人の従業員全員が事務所を出たのを見届け、自分も内陸にある宮城県丸森町の自宅に戻ろうと、車で事務所を出ました。習慣とは恐ろしいものですね。うっかり、普段通る海寄りの道路を走ってしまったのです。「津波なんて来るかな」。そう高をくくっていたようにも思います。

阿武隈川に架かる橋の手前で、トラックの運転手さんがすれ違いざまに窓を開け「津波が来るぞ」と教えてくれました。道路の前方に、がれきの塊が押し寄せて来るのが見えました。

大慌てで道路沿いの商店の駐車場でUターンしました。

濁流が堤防のすぐ脇まで押し寄せ、川にも津波が逆流し、水かさが増して来ます。気付くと、自分がいる堤防が津波に挟まれた格好でした。水は一時、足元の約2メートル下まで迫り、生きた心地がしませんでした。

幸い、乗り捨てた車は津波に流されず残りました。そのまま堤防の上を走り、内陸の国道を経由して午後7時半ごろに帰宅。母(90)、妻(62)、長男(38)、長女(34)の家族全員の無事を確認しました。

工場の事務所は2階の床上まで浸水し、約3万平方メートルある工場敷地内にはトラック500台分のがれきが残りました。従業員は全員無事でしたが、水が引いた後、警察などによる捜索が行われ、敷地内で10人の遺体が見つかりました。

再建した工場の入り口の看板には、到達した津波の高さ「4・05M」の表示を掲げました。「天災を甘く見てはいけない」。従業員一同、看板を見るたびに、そう自戒しています。

津波で浸水し、がれきに覆われた丸藤シートパイル仙台工場の事務所＝2011年3月17日（渡辺さん提供）

現場から

見聞きして「気付き」得る

福島市清明小校長
高橋　正之さん(59)

清明小は地域や家庭と連携して防災教育に取り組んでいます。学区は阿武隈川沿いにあり、洪水被害を受けてきました。1986年の「8.5豪雨」では校舎も浸水しました。

児童は毎年、浸水地点などを回り、地域の方から当時の体験を聞いています。現場を見ることは「気付き」につながります。水門のごみは氾濫の原因になり、川の清掃が災害対策になる―といった具合に。

学校では児童と保護者の「家族会議」も開き、災害時の対応などを話し合う機会を設けています。こうした活動を通じ、危機回避の力を付けてほしいです。

弱者の存在 地域で共有を

大崎市婦人防火クラブ連合会
古川支部長
千葉ひさをさん(68)

東日本大震災では、大崎市で多くの住宅が壊れる被害が出ました。市役所で炊き出しを1週間続けましたが、食料などの備蓄の必要性をメンバーも強く意識するようになりました。

2015年9月の宮城豪雨の際は、道路が渋滞して助けに赴けないという体験をしました。身を守り、食料を確保するすべを、各家庭で常に考えておくことが大切だと思います。

自宅がある地区では、災害時の安否確認の役目を担っています。車いすの人など、弱者の存在をどれだけ地域で共有できているかということが、いざという時に役立つと感じています。